

なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠

No. 24-1

縄文時代 草創期の暮らし

鹿児島県の^{こいのほらいせき} 埴原遺跡(15,000年前)の遺物から縄^{いづつ}文時代の草創期^{ようす}の様子を考えてみよう。

柵ノ原遺跡は、標高39mの独立丘陵上にある。発掘された遺跡は約4,000㎡。配石炉4(舟形配石炉2)、集石遺構22、土坑8(煙道付炉穴1)などの遺構と、隆帯文土器片が1,000点以上出土している。また、石鏃・石斧・磨石・石皿・削器なども多量に出土した。

舟形配石炉は、南九州の草創期の遺構で、焼けた内面などから炉と考えられている。煙道付炉穴は、大小二つの穴がトンネルでつながる形をしており、土壌の脂肪酸分析の結果、イノシシに似た脂肪が残されており、薫

考古学者の多くは、草創期は住む場所を季節的に移動する半定住^{はんていじゅう}だったと言う^{こう}！

梶ノ原遺跡の人々
も30kmほど北にある
そうじやま 掃除山とおうらいとの間を往来
し、夏は梶ノ原、冬
は掃除山で暮らして
いたと考えられてい
る。

それは、二つの遺跡に、同じ規模で、特徴がよく似た定住跡が発見されているからである。



資料出所：岡村道雄『石器の歴史』講談社 1998年 p.34

【 南九州の縄文時代草創期の遺跡・黒曜石原産地 】



桜島の火山灰におおわれた南九州の遺跡

点線は堆積した火山灰の厚さ。約1万1000年前に噴火した。

(資料出所：岡村道雄『細文の生活誌』講談社学術文庫 2008年 p.62。)

*1 岡村道雄『縄文の生活誌』講談社学術文庫 2008年 p.80.

勅使河原彰は東京都あきる野市の前田耕地遺跡でも同様に、季節的に移動し半ば定住していたと言う。勅使河原彰『縄文時代史』新泉社 2016年 pp.85-86。

